

見えないものに目を注ぐ

岡 田 弥 生

上ヶ原キャンパスの中心に位置する中央芝生。今は新入生の明るい声が満ちて活気を帯びている。学院史によると、37年前ここで大学紛争を收拾すべく5000人の学生、教職員が集ってキャンパス解放集会が開催された。その在りし日に想いを馳せる。紛争の渦中で切り倒されたヒマラヤ杉に代わって新たなヒマラヤ杉が植えられた。教員・職員・学生が神から委託を受けてそれぞれの役割を担っているとする「協同社会」を目指す大学改革を誓って新たな歩みが始まった。そして今学院は2008年度に向けて大きく変わろうとしている。テレビのニュースを通して学院の動きを知るような慌しい事態である。確かに時代の要請に応えた変革は必要であるかもしれない。しかし果たしてこの学院がどうなっていくのか全容がつかめぬまま変化に巻き込まれていく不安をも覚えざるをえない。

振り返って学院は変わらないものに目を注いで様々な変化に対応してきた。天地万物の創造主を拝し、その真実に応える人間の真実としてのMastery for Serviceの精神を育んできた。そして機械論的因果連関で現実を問うのみではなくその背後にある愛、心、真実といった形而上学的な理念を尊重する教育を希求し、人間の実存性そのものへの問いかけを続けてきた。僭越ながら、制度上の大きな転機を迎えんとする今こそもう一度教員・職員・学生が本学の拠って立つ理念を確認する必要があるのではないかと思う。それはまさしく学院に奉職して10年目を迎える私自身にとっての課題でもある。願わくば、忙しさの中に祈りの言葉さえ枯渇する時にも、「昨日も今日も、また永遠に変わることはない方」(ヘブル13:8)を仰ぐことができますように、そしてこの小さきものにも、変革期に現実を担う愛と勇気が与えられますことを祈り求める日々です。

『私たちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです』(IIコリント4:18)

(社会学部教授)